

第二回 美術展覽會批評 文部省

黒田清輝君談

◎部分に就ての批評は、後日に譲るとして、極めて大體より觀たる、予の希望と所信とを御話致しませう。

◎總て批評なるものは、個々に就いて言ふと、當方にては何等の惡意が無くとも、案外妙な風に聞えるものであるが、大體なら批評せば少し注意に過ぎたと思つた事でも、去程當りさわりが出ぬ。兎角自分の頭にかゝつた事であると、直ぐ神經を悩ますもので、此れは人情上仕方のないものであらう。

◎全體、繪畫なるものは、理論と一致すべきものであるといふのが、私の主張で、畫が少しも書けないものが、批評をして少しも憚らぬとは、吾人の意を得ぬのである。予は此の點に於て、所謂技術なしの批評家は、何を標準として批評するのか殆ど解らない。

◎堂々たる議論、正々たる批評を下すならば、相當に畫は書けなくてはならぬ筈のものである。若し一片の畫も書く事が出來ずして、徒に批評のみを之れ事とすといはゞ、それは空論といはなければならぬ。例令ば古希臘の神の性質は、自分以下のものなら解る、併し神以上のものゝする事は解らぬと同一である。

◎是れは當に神のみでない、吾等にしても然りで、繪畫を熱心に研究する時代には、路傍に賣つて居た畫などを大層よいものと思ふて買つて來て、壁間などに貼つて樂んで居たものであるが、鑑識と技術との進むに従つて、曾て絶品と思つて買ひ求めて珍重したものも、極めて詰らぬものに見える様になるので、畢竟眼と手とが相俟たん

ければならぬものである。

◎乍併、審査員になると批評を下すに當つて、どういふ學問をして然る後に批評の任に當るかといふ様な事は、元より出来る譯のものではない、今日は現在の儘で批評を下すより外に道のないものである。けれども、予は展覽會の出品を一々評して、之を公表する事を好まぬ。

◎さはいへ、親友又は門下生の畫に就ては、親友門下生間に於て予の意見を求めらるゝものには、及ぶ丈け批評論量を試みる積りである。

◎元來、予は今日の展覽會を開く事に就ては、餘程以前より希望して居た事で、已に予が明治廿六年の歸朝以前、佛國に畫を學びつゝある當時より、其希望を抱懷して居たのであつたので、歸朝後も數々有力の人に説いたのであつた、それが漸く昨年初めて第一回の展覽會を見る事になつたのである。

◎そこで、昨年と今年との展覽會を比較して見るに、昨年の出品の大多數は、突差の間に製作した、所謂一夜造りのものが多い様であつたが、其割には實に上出来であつたと言はんければならぬ。

◎其此に至りし原因を討究するに、展覽會の開かるゝ事は、一般の畫家の囑望して居た矢先で、所謂機運が熟したと共に、普通の展覽會とは大に趣きの違ふ所より、畫家の大奮發も亦大に預つた結果であらうと思ふ。

◎然るに今年開かれた展覽會の成績は如何といふに、昨年よりは大に佳良である、進歩の跡も發達の經路もよく見えて居る。此れは一ヶ年といふ準備の時間もあり、又昨年の成績に照して、大に奮發した爲めであらう。併し此の進歩發達は、いつ迄も此の成績を追ふて進むとは限らぬ。例令ば子供の成長する様なもので、或る程度迄

生長すれば、其後は静止の時代もあるだらうし、或は退歩の時代が来るかも知れぬ、けれども今日は恰も子供の生長時代と少しも異ならんから、途中にして挫折する様な事のないのが肝要で、此の子供が一人前のものになるには、今後少なくとも三十年はかゝるであらうと思ふ。

◎何ぜなれば、今日稍々成長しかゝつて居るものは、今後三十年を経なば、五十歳位になる、畫家の五十歳は最も活動すべき時であるから、此の時代が來なければ日本の油繪は、充分に發達し、まいと思ふのである。然れば今日の青年畫家は。此に大に顧みる處ありて、畢生の心血を注がなければなるまい。

◎油繪は實に長足の進歩を以て發展したので、日本人に油繪たるものゝ多少話柄に上る様になつたのは、實に四年前である。即ち佛國の大博覽會があつたので、一新紀元を畫し、更に卅六年の大阪の大博覽會、其後のセントルイの博覽會があつた爲に、大影響を享けて、俄かに今日の發達を見る様になつたのである。

◎然るに今日の畫家の生活状態を見るに、所謂氣の持ち様によるであらうが、社會から遠かつて獨り超然として脱俗底の人の様に考へて居るものがあるが、此れは大なる誤解で、同一空氣の中に生存して居る曉は、畫家獨り超然たらんとしても、そんな事の出來得べき筈のものでない。況んや時勢なるものは、偉大な力あるもので、或る主義をもつて時勢に反對仕様としても、大勢已に定まれる時は、又如何とも仕様がないもので、畫家たるものも、此に大に注目しなければなるまいかと思ふ。例せば日本の社杯の如きもので、如何に優美だの或は威嚴があるなどゝいつて、其制度風習を保存すべく、東京市中を着て歩行したならば、世人は之を評するに如何なる辭を以てするであらうか、此の一事を以て見ても、今日の畫家たるものは須く反省すべき時代であるまいか。

◎油繪も然りて、予等の洋書を學びしは、強て西洋畫を其儘踏襲しなければならぬといふ理由はない。唯、日本美術が廢頽して、世人の歡迎する事益々冷淡に赴くを見て、さういふものに骨を折るのは、恰も枯木を培ひ、肥料を施すと一般故、其れよりは寧ろ菁々として萌芽を生じつゝあるものを培養した方がよいといふ考へより遂に洋畫の研究に一身を據する事になつたのである。

◎幸にして新芽漸く發育し、此に第二回の展覽會を開くを得たるは、大に慶すべき事にして、同時に其結果の喜ぶべきものがある、そは何であるかといふに、此の會の開かるゝ前迄は、洋畫に對して種々なる違つた見解を固守し、互に疾視反目して居た時に、一方には何とかして此の間の調和をしたいと思つて居た時機に、展覽會が成立し、此に一堂に會して公平の批評を受け、或は意志の疏通を圓滿にし、此に統一の曙光漸く仄めいて來たのである。是れ畢竟するに今迄は自己の管見を以て、世間を見て居たのを、大見解を以て世間を廣く見るといふ事になつたのであらう。

◎そこで今年の展覽會は何ぞ昨年より好成績を得たかといふと、昨年に鑑みて大に鼓舞された結果にして其鼓舞さるるには、二大原因がある様に思はる。其一は昨年は突差の間に製作した繪畫たるにも拘らず、大に賣れ行きがよかつた爲に、畫家が不時の金を懐にしたので、恐く愉快に思つたらうと思ふ。如何に世に遠ざかる傾向ある畫家なればとて、社會に生存する限りは生活せずには居られない、此の點よりいへば金を取る事は、定めし愉快に感じたであらう。其二は一堂に會して判斷を受け、自己の眞價を確める事の出來るといふのも大原因をして居るであらう。

◎ 明年も亦本年に劣らぬ好成绩を収めたい。それには志氣を鼓舞してなるべく傑作を出品させる工夫が肝要であるから、定めし文部省に於ても、獎勵の機關として新案が現はるゝやも斗り難い。

◎ 更に出品物に就て、予の觀察せし處によるに、昔に展覽會の爲に、俄かに書いたといふ様なものは比較的少ない。此の現象たる輕卒に考へれば、頗る善い様ではあるけれども、少しく熟考すれば強ち善い事であるとも斷言は出来なからう。といふのはどういふ譯かといふに、展覽會に出品するのであるとて、展覽會風に書くものがあらう、又は見ばいのせざる趣味一徹の繪もあるだらう。例せば互に相對して談話をするには頗る愉快であるけれども、若し宴會の席上談話風に演説をしたには、少しも見ばいがないと同じく、今の展覽會も或は調子よく間の抜けぬものであるといふに過ぎない。

◎ 併し今日の展覽會は幸にして斯る間の抜けぬ調子のみよいといふ様な畫のないのを喜ぶのである。唯、技術の至らざるあるは實に遺憾至極といはんければならぬ。けれども一面より見れば或は調子のよい事を教えて居ないとも限らぬが、是れ決して排斥すべき事ではなからう、今日の傾向は略々此の方面に赴きつゝある故、單に繪畫として見るにはよからうが、味ふ上に於ては物足らぬ感が起るに違ひない。

◎ 故に展覽會に就ての希望は、畫家が餘り法螺許り吹く様な事をしないで、立派なものを製作するといふ事を用意するて貰ひたい。且つ一般人も次第に油畫の趣味を感じる事深くなる故、益々畫家の奮發を要する時であらう。夫故、予は予の門下生を誡むるに、同じ展覽會に出品する繪であるとして、徒に展覽會モノに書く事を止め、力あるものを書く間にも、頭に空虚を作つて俗受け許りするものを書く様な事をしてはならぬと誠めて居る。

◎ 以此、予の審査に従事する方針は、所謂展覽會風のものも採用し、同時に趣味のあるものも採用するといふ精神であるから、審査員としては一定の意見がない、ないとして審査が出来ない譯のものでない、乃ち其人の書きし繪を立脚地として、其出品に就て審査を試むるといふ方針である故、或は一般の審査員よりも採用の仕方が違ふかも知れぬ。故に審査員である予が、審査に際しては標準が違つて居るから、展覽會専門に書いたといふ様な輕薄なものでも、採用する事がないとも限らぬ、同時に極めて鳥渡した出品で、同情すべき價値あるものでも、他の展覽會専門の出品と比較して、其を惡く批評しなければならぬといふ様に、一定の意見はないのである。

◎ 若夫、日本畫に就ては、予は元より門外漢であるから、何等の批評を此の間に加へる資格はないが、常に感じつゝある事は、日本畫の巧みといふものは、唯家に飾つて置いて楽しむといふ程度より、ないのに、どういふものか遠近を付ける爲に、濃淡の色彩を用ゐるのは、日本畫の立場より見て色の材料に適するものあるやどうかを疑ふのである。想ふに日本畫の特色、趣味といふものは筆力即ち運筆の點にあるのだ、然るに濃淡を以て畫く爲に縦横に活躍せる筆力が少しも見えなくなるとは甚だ面白くない。蓋し日本畫は實物と同じ風に書かんければならぬといふ事はあるまい、日本畫は日本畫として一種異なつた趣味を發揮するも亦大に一機軸であらうと思ふ。

◎ 元來日本畫の特長は、運筆の妙にあらうと思ふ、其運筆の妙趣味を忘れて、形のみ探る事とせば他に木炭畫もあり水彩畫などの領分がいくらもあるのである。

◎ 且つ水彩畫も然りで、水彩畫をして隅から隅まで繪の具を油繪の如くに塗るに至つては、水彩畫の特色は何れへか失せて仕舞ふのである。須く水彩畫は水彩畫の趣味風韻を失はん様にしなければならぬ。

◎終りに臨み、文部省に希望する事は、展覽會場の常設館を造つて貰ひたい、光線の不完全な、狹隘極まる不設備の甚しき借小屋にて、年々歳々開會するといふ事は、一國の體面より見ても、はた美術獎勵の方面より考へても、快よからざる事であるまいか。

『太陽三四一六明治四二年二月』

第二回文展(明治四二年一〇月二十五日〜二月三日)に対する批評。